

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35の存在を考察する。



2010年、U-30として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家と議論し、あらたな建築の価値を批評し共有するために召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動をされていた建築家・史家である、東より、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、中国地方の三分一博志や、九州地方の塩塚隆生などが、中部と四国を除いた、日本の6地域から集まった。そして開催初年度に登壇した、三分一、塩塚など1960年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに1970年代生まれの建築家・史家を中心となる。3年後の2012年には、この8人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013年より、芦澤竜一、吉村靖孝）と2人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）による現在のメンバーにより開催を重ね、8年が経つ。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約10年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この10名が集まった4年目の開催の時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーとして位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家と出会うのは開催前年度の2009年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に出向き、27組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表とする出展者7組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら、自薦による公募を開始するものの、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式としていた。また海外からの応募もあり2011年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり1年目は完全指名、2年目の2011年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催5年目の2014年である。このとき初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交

わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 7 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した。しかしこれが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出する「伊東賞」が隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展者としてシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けていくのが、本展のあり方のようだ。2020 年は昨年 10 年間の開催を終え、基盤をつくり準備を整えた本展があらたな 10 年を目指そうとした 1 年目。大きな試練を迎えることになったが、適切な備えを講じて、本展は今回 11 年目の開催を無事に開幕した。

この出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたシンポジウムのメンバー 10 名が一同に揃う開催後に場を設け、今後の U-35 のプログラムのあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年度より開催している。今年は、昨年の審査委員長倉方俊輔と、2020 年開催の審査委員長谷尻誠、そして来年の審査委員長を務めることになった吉村靖孝を中心に、第 4 回目の「10 会議」を開催した。



——— それでは、「10 会議」をはじめさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたシンポジウムのメンバー 10 名が一同に揃った開催後に開催させていただいております。今年度は開催 11 年目となる新たな 1 年を迎えたことから、10 年後を見据えた U-35 のプログラムのあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する場として設けております。これまで審査委員長を務めていただきました五十嵐太郎先生、平田先生、倉方先生、今年、2020 年開催の審査委員長の谷尻先生、そして来年の審査委員長を務めていただくことになった吉村先生を中心に、このたび万博のプロデューサーとなられた藤本先生にも同じ開催地・関西で行っている U-35 展覧会についてのご意見をいただきたく、第 4 回目「10 会議」を開催いたします。開催当時より本展オーガナイザーを務めてくださっている平沼先生、本日も進行の補足応答をどうぞよろしくお願いいたします。あらためまして長時間にわたり、本日も大変お疲れさまでございました。またこの情勢のなか、どの先生も欠席されず、奇跡的な開催ができましたことを感慨深く感じております。11 年目の U-35 2020 記念シンポジウムをただ今、終了させていただきました。まずは今年の出展者を振り返り、印象をお聞かせください。本年の出展者の選出から GOLD MEDAL の審査委員長を務められた、谷尻先生よりお願い致します。

谷尻：総評の繰り返しになりますが、U-35 は本当に優秀な方たちが出展されるようになりましたね。その上で彼らは、ひとつの建築をつくることで終わりになっている印象も強かったように感じています。もちろんこの場に出てくるような出展者の皆さんは、今後も建築家として立派にやっていくのだと思うのですが、その射程距離が少し短い。もう少し先の未来を想像してつくって欲しいと感じました。それは使われる建物の部分と設計手法という創り方の両方に対するの期待をしています。

倉方：本当に近年、段々とハイレベルな発表になってきて、コンセプトも骨太で発言も含めて安心して聞いていました。出展者も結果的にですがバラエティーに富んでいて、きちんと言葉にしようと努めていて、議論になりやすい印象を受けました。

平田：僕が審査委員長を務めた年に皆さんで推薦枠を設けたのですね。多分それで相当レベルが上がって、今年はその効果が浸透したのでしょうか。とても良かったと思います。ひとつのムーブメントを成型する建築論ができかけているような感じさえあって、それも凄く良いことだと思っています。でも、せっかくこれだけのメンバーが集まって話すので、個別の発表者に対してのコメントだけではなくて、もう少し今の建築に対してそれぞれの考え方が浮かび上がるようになることを望ん

でいます。そのためもう少し時間が欲しい。だから僕たちの挨拶はカットするとか、あと 30 分くらいあると何とかなるでしょうか。

平沼：来年一度、僕らの挨拶をやめてしまいませんか。客席での視聴はせずに、開演時間に壇上に座り登壇する。この面子で固定できていますので、そろそろ全体が認めてくれる頃かもしれないし、講評会形式を強めて、平田さんが言う、今の建築論をこの場で浮かび上がらせる機会にしましうか。

藤本：うんうん、そうしてみましよう。

倉方：その方が聞いている人にも教育的ですね。やはり我々の世代はそろそろ学生との年齢的な距離も出てくる頃だから、「こんなことを考えている建築家史家がいるんだ」と、ある意味、この時代の在り方も示せるし、そのことから、発表する U-35 の在り方も分かるんじゃないかなと思います。そのためには、確かにもう少し議論も含めて互いの像が見えてきた方がいいかもしれません。

平田：個別の発表は、事前の打ち合わせをして、誰が誰に対して答えるかを決めておいても良いですよ。そうすると会場とも共有しやすいのかもしれない。だからコメントは簡潔にして最後の議論にもう少し時間をかけるようにすると、更に面白くなるんじゃないかと思います。

藤本：平田の議論にはついていけなくなりそうな気はするけどね。さっきのはギリギリだったよ。

一同：わはは（笑）。

平田：時間がないと思って、これ以上喋ったら喋りすぎだなと思って余計分りにくくなっちゃった（笑）。藤本がちゃんと解説してくれたから良かったです。でも途中からすごい覆いかぶさるように良い人になっていたよね。

一同：あはは（笑）。

藤本：だって、応援してあげなくちゃいけないでしょ。結構、厳しいことも言っちゃったけどね（笑）。

—— 谷尻先生 1 年間、審査委員長のお役目大変お疲れさまでした。そして皆さんへ変更の効果についてお聞かせください。昨年より今年のシンポジウム発表形式とディスカッションの時間を多く設けようと修正致しました。来年に向けて、このプログラム修正の効果を振り返っていただけませんか。

五十嵐太郎：良くなりましたね。変更の効果があったと思います。

平沼：来年も同様の時間配分で議論を少しでも増やせたら、ちょうど良いですね。

藤本：良いと思います。やはり議論が一番面白いから、その時間を多く取るような配分にしましう。

倉方：最低今日くらいの時間があれば、出展者が一人一人、一通り話せたので良かったですね。

芦澤：以前のように、壇上でみんなが座ったまま、マイクを回せばよかったんじゃない？

平沼：今年はこの情勢ですから感染拡大予防として、マイクをできるだけ共有しないように備えたのです。

一同：なるほど。



五十嵐太郎：そういえば演台で人が入れ替わるたびに、マイクを消毒するのを見ましたね。

平沼：来年は感染状況が変化するといいなあとっていますが、正しく恐れてその情勢に合わせた開催を継いでいきましょう。

芦澤：発表者に対して質疑が、1～2名だけというのは少なすぎませんか。

藤本：そのくらいで良いじゃないですか。

倉方：後で議論する方が良いですね。

藤本：そうですね。個別に集中した質疑をするというよりは、全体で議論を交わす方が良いでしょう。もし質疑が決まった人に偏ったら、少ない人をこちらでケアしてあげれば良いでしょう。

五十嵐太郎：発表者1人に対して少なくとも1問は質疑をあげた方が良くないですか。

平沼：質疑がないのもやや危ういですし、上世代の建築家史家の中でも、これまで発言をされない方もおられたため、偏ることを避けるために、司会の方に指名で当ててもらえるようにお願いしていました。

藤本：そんなに気にならないから大丈夫ですよ（笑）。僕は司会の方が振り分けて当てるというシステムが、どうも非人間的に見えて苦手なんです。

平沼：（笑）それでは来年、意欲的に挙手制でやってみましょうか。

藤本：はい。この固定した面子だと、その方が盛り上がるような気がします！

——— 4年前、第1回目の「10会議」を発足し、本展のあり方を議論させていただく中で、出展者の選出方法に他薦である推薦枠を追加することとし、1他薦・推薦枠、2自薦・公募枠、3シード・指名枠との3枠といたしました。また昨年の開催中、ゴールドメダルを獲られた秋吉さんから、出展者世代の方が若手の同世代の存在をご存じであるとのこと意見をいただいたことから、今年の出展者からそれぞれ2-3名のお薦めリストをいただき、これを参考に、皆さんから出展候補者を選出いただきました。来年の10名による選出者の簡単な紹介を五十嵐太郎先生よりお願いいたします。

【2021年推薦】審査委員長：吉村靖孝

01. 五十嵐太郎 ●原田雄次 | 原田雄次建築工芸
02. 倉方俊輔 ●太田翔+武井良祐 | OSTR
03. 芦澤竜一 ●山口晶 | TEAM クラブトン
04. 五十嵐淳 ●森恵吾+張婕 | ATELIER MOZH
05. 石上純也 ●岸秀和 | 岸秀和建築設計事務所
06. 谷尻誠 ●鈴木岳彦 | 鈴木岳彦建築設計事務所
07. 平田晃久 ●松下晃士 | OFFICE COASTLINE
08. 平沼孝啓 ●樂家志保 | EIKA studio
09. 藤本壮介 ●板坂留五 | RUI Architects
10. 吉村靖孝 ○2021年 審査委員長のため不選出

【2019年推薦】審査委員長：倉方俊輔

01. 五十嵐太郎 ●柿木佑介+廣岡周平 | パーシモン+ヒル
02. 倉方俊輔 ○2019年 審査委員長のため不選出
03. 芦澤竜一 ●佐藤研吾 | KOROGARO
04. 五十嵐淳 ●武田清明 | 武田清明建築設計事務所
05. 石上純也 ●津川恵理 | 津川恵理建築設計事務所
06. 谷尻誠 ●中尾彰宏 斎藤慶和 | STUDIO MOVE
07. 平田晃久 ●山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所
08. 平沼孝啓 ●岩瀬諒子 | 岩瀬諒子設計事務所
09. 藤本壮介 ●百枝優 | 百枝優建築設計事務所
10. 吉村靖孝 ●秋吉浩気 | VUILD

【2020年推薦】審査委員長：谷尻誠

01. 山道拓人 千葉元生 西川日満里 | ツバメアーキテツ
02. 勝亦優祐 丸山裕貴 | 勝亦丸山建築計画
03. 山口晶 | TEAM クラブトン
04. 宮城島崇人 | 宮城島崇人建築設計事務所
05. 葛島隆之 | 葛島隆之建築設計事務所
06. ○2020年 審査委員長のため不選出
07. 松井さやか | 松井さやか建築設計事務所
08. 樂家志保 | EIKA studio
09. 山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所
10. 板坂留五 | RUI Architects

前頁記載の他薦・推薦枠より 2-3 組、自薦・公募枠より 2-3 組、

前年の GOLD MEDAL 受賞者と TOYO ITO PRIZE 受賞者のシード枠より 1-2 組=計 7 組

●2020 年 GOLD MEDAL 受賞 シード枠出展候補者 山田紗子

2020 年 TOYO ITO PRIZE 受賞 シード枠出展候補者 ツバメアーキテクト

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

五十嵐太郎：原田雄次さん。日本に戻ってからまだ時間が経っていないので、あまり実作はないように思いますが、審査に関わったアイデア・コンペで 1 等を取られて知りました。横浜国立大学の Y-GSA を出て、チリのスミルハン・ラディックの事務所で修行をしていた人です。スミルハンはある種ポエティックというか、今の日本に全然ないタイプの建築を作っています。コンペのときの原田さんも、そうした雰囲気の出していました。これまでにない毛色の若手ということで、こういう活動をしているのかを僕自身も知りたいと思い推薦させていただきました。

司会：ありがとうございます。では続いて倉方先生お願い致します。

倉方：僕は OSTR という太田さんと武井さんのユニットを推薦しました。サイトを見るとリノベーションが中心ですが、とても面白そうなことをやっているように感じたことと、関西の人を応援したいと思って推しました。今年は名古屋からの出展者が多かったですが、東京に一極集中しないことも選出理由のひとつです。



司会：はい。続いて芦澤先生お願い致します。

芦澤：僕は去年も推薦した TEAM クラブトンです。関西を拠点に設計施工で活動する、建築の枠組みを結構広げた活動をしている様子です。人を巻き込みながら DIY で建築をつくるといった側面も持ち少し軟派な感じもしますが、一度、展覧会をみて展示手法に興味をもちました。昨年はなぜ駄目だったんですかねえ、谷尻さん。あんまり印象残ってないですかね？

一同：あはは（笑）。

谷尻：そうですね。

芦澤：だから今年も推してみようかなと思いました。

司会：では続いて五十嵐淳先生お願いします。

五十嵐淳：昨年、雲南省に行った時に、お会いした方です。スイスのメンドリシオに留学していた森さんが同じ大学で付き合い始めてそのまま結婚した奥さんと、上海で事務所を始めています。まだ 30 歳くらいで若いのですが、中国だからこそそのプロジェクト・チャンスがある様子です。奥さんが中国人なので言葉には困らないし、これからいろんなプロジェクトを発表する機会が増えてくる人のように思っています。幾つかつくるうちに、上手になってくるんじゃないかなと思って推薦しました。アジアで活動をしていく上で、上海は重要な位置づけになってくると思います。そういうことも含めて推薦しました。

司会：ありがとうございます。続いて、平田先生お願い致します。

平田：オフィスコースラインという中国人の人と一緒にやっている事務所の松下さんです。独特な感覚がありそうな感じがして推薦したいと思いました。少しインテリ的な気もするのですが、それが良い方向に出てくると良いですね。まだどれほどのものか、そこまで見えていないので、確認したいと思いました。

石上：僕は岸秀和くんです。あまり知らない方なので会って話してみたいなと思いました。なんか

シンパシーを感じました。

平沼：シンパシーを感じた！？（笑）。はい。僕は昨年、応募資料がダメだったので榮家さんをもう一度、推薦しました。

藤本：榮家さんの作品は、見てみたいです。

平沼：そうですね。言わずと知れた大西麻貴事務所の番頭さんです。きちんと資料を出してもらった上で、来年の審査委員長の吉村さんにみてもらいましょう。

司会：藤本先生お願い致します。

藤本：板坂留五さんです。ネットで調べると結構、謎めいているのです。

平沼：昨年、吉村さんが選出されていましたね。

藤本：あ、吉村さんが選んでいたなら良いですね。

平田：青木淳さん絶賛の芸大卒生です。



藤本：それはもう絶対見てみたいです（笑）。

一同：あはは（笑）。

平田：そう。謎なんです。周りの風景にあるような要素を、ある種ポストモダンのなんだけど、それとは少し違う雰囲気表現するのです。

石上：名前を聞いたことがあります。四国あたりに建築をつくっていますよね。

平田：淡路島か、小豆島ですよね。

藤本：建物はただの小屋みたいなやつですよね。半麦ハットでしょうか？

五十嵐淳：西澤徹夫が実施設計を手伝っていたようですが、でも面白そうですね。

平田：サポート体制抜群の様子です。でもそんなにすごい奴なのかと興味があります。

藤本：よし、是非！

平田：藤本っぽくないですね。

倉方：意外性が良いのでしょうか。

藤本：山田がおススメしているから良いかなと思って（笑）。

一同：（笑）

平沼：推薦枠から2、3組、公募枠から2、3組、今年は金賞と伊東賞からのシード枠から2組。一昨年と同じ選出数ということで審査委員長の吉村さんに選出してもらいましょう。

吉村：はい。どうぞよろしくお願い致します。

—— 昨年の 10 会議にて、建築への興味をこれからの若い世代に示そうと、各先生方による展覧会会場でのイブニング・レクチャーを本年より導入いただきました。本来の目的は、大阪駅前という地方都市を代表する駅前での開催を継続するため、動員数を増やすことではじめたのですが、この情勢でリアル入場には制限がありましたため、リアルとリモートを併用することとし、昨日、藤本先生から開始しましたレクチャーは大きな効果がありました。また、関西を中心に地元高校生や専門学校生など、10 代の参加が半数を超えました。建築を目指す後進の方に向けて、3 部作での開催を予定させていただいております。本年のタイトルとしては、「日本を代表し世界で活躍を始めた建築家・史家たちが独立までの前夜、建築を目指したルーツが明かされる 3 部作第一弾！（少年～学生期編）」と題しています。つまり来年は、学生期～独立期までを語っていただくようなシリーズですが、皆さまのご意見をお聞かせください。

藤本：昨日僕は、第一弾どころか、全てを話してしまって、ダイジェスト版になっちゃった（笑）。

司会：今年は、少年期から学生期までの内容で、約 90 分（実質 75 分）お話しいただくようにお願いしていました。

藤本：少年時代の話だなんて、忘れちゃっているから写真がなくて（笑）。

平沼：（笑）まあそうですね。理由として本展はこれまで、自主的に見に来る建築を学ぶ大学生ばかりでなく、関西一円の高中生や高専を中心に、専門学生らの授業の一環としても役立ててもらえており、普通科の高校生には建築というわかりづらい職能の取り組み、また工業高校生には教科書に副う建築教育だけではなく、設計・施工のプロセスという実践を経験する「体験型の建築教育の現場」のように捉えてくれていました。今年はこの情勢から、昨日の藤本さんのレクチャーでは、親がりモートで聞いていて、それを小学生や中学生の子と一緒に聞いていたというケースもあったと聞きましたが、つまり学生＝大学生ばかりでなく、恐らく高校生以上の学生が聞いてくれるので、U35＝35 歳までのスライドを準備する中で、小さい頃からのスライドを準備して下さった方もいたため、それだったら 3 本に割っておいてというお願いをしたんです。建築に興味を持ちはじめた学生からするとスターな訳ですが、僕らの年齢が高くなりはじめたこともあって、圧倒的な設計の実力の差を見せつけてしまうのではなく、どちらからという苦節の学生時代、それほど順調な人生プロセスで今があるわけではないということを、柔軟に話してあげてください。

藤本：それぞれで柔軟にという感じでよいですね。

平沼：はい。特にこの開催地・関西はものづくり文化が栄えたおかげでワーカーたちの台所のように食文化が発達した地域だとも聞きます。今年はこの情勢は、関東や他の地域に比べて、生活に大きな影響を受けた親を持つ学生が多いようにも聞きました。また、その親世代の層は、大学へ進学をさせるより、技術高校に進学させて手に職をつけさせようとした親世代からの影響が大きかったようです。大学生でも、来春には学校をやめなくてはならない学生もいるように聞きますが、本展に出展をされる U35 の若手建築家の応援ばかりでなく、それぞれの方が後進で建築を目指す若い子たちへ向けて、夢や希望を抱くようなレクチャーを聞かせてあげてほしいと願いました！

一同：わかりました！

平沼：院生・大学生たちは 10 年後でしょうが、もしかすると 20 年後、U-35 に出てくる人たちがいるかもしれません。建築界は建築に興味をもつ若い世代を応援するような分野になるよう、この先にやってくる輝く時代に向けて、可能性を示してあげてください。

U-35 2021 開催期間 展覧会会場 イブニング・レクチャー＜予定＞

（10 月）

15 日（金）藤本壮介（ふじもとそうすけ）

16 日（土）●シンポジウム I A50 10 名の建築家・史家

17 日（日）五十嵐淳（いがらし・じゅん）

18 日（月）平田晃久（ひらた・あきひさ）

19 日（火）谷尻誠（たにじり・まこと）

20 日（水）倉方俊輔（くらかた・しゅんすけ）

21 日（木）吉村靖孝（よしむら・やすたか）

22 日（金）五十嵐太郎（いがらし・たろう）

24 日（日）石上純也（いしがみ・じゅんや）

25 日（月）芦澤竜一（あしざわ・りゅういち）

平沼孝啓（ひらぬま・こうき）



——— ありがとうございます。本展のような建築展を継続的に取り組む意図のひとつとして、今後の建築展の在り方を追求すべく、実験的に取り組んでいきたいと思います。一昨年、総入館者数 50 万人を超えた「建築の日本展」に関わられた倉方先生、「インビジブルアーキテクチャー展」に関わられた五十嵐太郎先生より、どのような建築展の在り方を模索していけば良いかお話しただけないでしょうか。

倉方：今年は特にイベントが中々開催できなかつた中で、あらためて U-35 展は今日も会場が人と作品で埋め尽くされ、来場者が相当多かつたように感じました。やはりこういうことを継続的に行うことが大切であり、社会的にも非常に大事な展覧会として育ち始めたように思います。展示内容も目でしっかり見られる模型があるとか、細かくてもモノがしっかりあるとか。一昨年、昨年と段々展覧会自体の力が増している時期ということと、相対的に社会的な力を持った原寸の台頭、実物の貴重さというのが価値が増しているのです、その 2 つの掛け算で多くの人たちが来るべき展覧会に今年はどうやく成つたんだなぁと実感していました。

司会：ありがとうございます。それでは五十嵐太郎先生お願いします。

五十嵐太郎：展示はこれまでと同じようにモックアップがあつたり模型があつたりと、表現手法自体に変わりがなかつたですし、建築展そのものの新たな展示手法にも、来年期待をしたいです。最近、自分が監修した、日本橋の建築を紹介する「装飾をひもとく」展（高島屋史料館 TOKYO）で周りの建築マップを配りましたが、とても喜ばれています。会場を出てから、建築めぐりを実際にできるからです。U-35 展に来る人は、建築好きな人だと思しますので、大阪駅周辺のおすすめの建

築マップを貰えると、梅田周辺で徒歩圏の建築を体験して帰っていただけたらと思います。イケフェスでいっぱい蓄積があるわけだから、この辺りの周辺データを貰い、相乗効果を考えていくのもいいですね。

司会：ありがとうございます。展覧会を観に来るといふひとつだけの理由だけではなく、スカイビルも含めた周辺の建築巡りと合わせて足を運んでもらえる工夫も必要です。他にも何か、建築展についてのご意見をお聞かせいただけないでしょうか。

吉村：出展者の展示エリアの配置は、いつも誰が決めているのでしょうか。

司会：出展者に希望書を出していただいて、被つたら双方の方に相談して決めていただいています。

吉村：そうでしたか。昨年も一番最後が外国枠だったから、少し気になりました。

五十嵐太郎：なんとなくですが、並びが似ていますよね。

吉村：最後でクイッと、捻られるみたいな感じが似ていると思ったのです。

五十嵐太郎：コーナーに元気な女性建築家がいたりするのも似ているなぁと思いました。

一同：（笑）

平沼：もう一步、建築展全体に意味を持たせるなら、当年の審査委員長を務め選出した建築家史家が、各出展作品をみて各出展者と調整をしながらキュレーションする。もちろんそこには太郎さんや倉方さんに監修に入ってもらいながら、文字や映像を残して展示していくというようなことに、既に気づいておられると思いますので、それは数年先、今後審査委員長が 2 巡目の時期あたりで、この展覧会の市場成熟度を見ながらこの 10 会議で相談させてください。

——— 最後になりましたが、引き続き今年の応募条件をこのまま、独立した U35（35 歳以下）の提案を募ります。そしてこれから応募をしてくる若手へ、この 10 会議の兄貴分の五十嵐淳様よりアドバイスをいただけないでしょうか。



五十嵐淳：シンポジウムの出展者発表を受けて、物足りなさみたいなものを率直にまとめ最後に発言させていただきました。それぞれの建築家もつ「作家性」というものには、いくつかの意味がありますよね。つくっていても、まだつくってなくても良いのですが、図面や建築を見ただけで、その人を表す個性みたいなものがあると、やっぱりこちらもワクワクするし、ないと物足りなさをどうしても感じちゃう。それで、つついあのような発言をしてしまいます（笑）。でもそれは仲間になって欲しいからです。建築を創る者たち同士、仲間意識を持ちたいんです。まあ、ここにいる貴方たちは、それぞれ他にはない、強烈な個性があるじゃないですか！（笑）

一同：アハハ（笑）。

五十嵐淳：そういう強いキャラクターみたいなものは、世代とか時代とか社会とかでは語れないと思うのです。それを感じたい、発見したいというのがここに10年以上も通う大きな理由です。ここにいるような、そういう建築家と出会いたいですね。

—— 皆さま本日は、展覧会会場での視察にはじまり、4 時間余りのシンポジウムの後、10会議までご出席いただき、貴重なご意見をいただけて深く感謝しております。最後となりましたが、来年のシンポジウムは、2021年10月16日土曜日と決定しております。12年目の開催もどうかよろしくお願いたします。本日は、誠にありがとうございました。

2020年10月17日

U-35 シンポジウム会場 上階・ナレッジシアター・リハーサル室にて



U-35 2020シンポジウム会場の様子



U-35 2020シンポジウム会場の様子